

というのはややこしい。譬の字にデンの読みも加えていたのだらと思う。

小生は皮膚科医であるが、この書で正しい読みを確認できたものも少なくない。発疹はハッシンでなくホッシンであり、貼付はテンプでなくチョウフであり、皰裂はキレツとも読める(クンレツ、現在は主としてキレツは亀裂を用いる)などである。本書で初めて知った皮膚科関係用語も少なくなく、不勉強を恥じるとともに編集者、監修者のご苦心・ご苦労のほどを察した。医学図書館では必備の基本書であろうし、我々も座右において精々利用したい一書である。

(長門谷洋治)

〔櫛ミクス、一九九〇年、B6変形判、二九〇頁、定価二、三〇〇円〕

坂出祥伸編『中国古代養生思想の総合的研究』

本書は、冒頭にもしるされているように、昭和六十、六十一年度の二年間継続した文部省科学研究補助金による同名の研究成果をまとめたもので、二十九名の方々が執筆されている。

「養生」とは、本書の中でも、柴田清継氏が述べているように、これを「ヨウジョウ」と読むか、「ヨウセイ」と読むかで違いをうむ。医とは大きく cure と care に分れるが、care についてみれば、前者は after care で日常我々が使っている「病は養生第

一」といった意味がある。後者は Before care であり、いかに病気にかからぬか、健康でいられるか、その結果、いかに長生きできるかということで、本書はこのことについて検討を加えたものである。

現在の気功、薬膳、さらに少し前の太極拳などにこの想いは生きつづいている。この理由を掘りさげる必要があるわけで、それは強く受けつがれてきた中国人の現世利益主義とか福・禄・寿といったものに結んでいる。

また養生とは、摂生、衛生という言葉にも似ている。またさらに、性と命という問題にも触れていく。あるいは、養生を自己的養生と、他力的養生にも分けられよう。さらに、養生と中国伝統医学とはひろく、オーバラップしているし、中国古代の神仙術、道家の思想、東漢末におこった道教(仏教とも)ともひろく関係している。このような前提で本書を読むと、内容も多岐にわたっていることがわかる。筆者が読んで、興味を持ち、かつ参考になったのは、やはりその第一章「医薬学と養生思想」であった。枚数の関係で細かく触れる余裕もたないので、その題名と著者とを紹介しておく。

『山海経』の山経にみえる薬物と治療(大形徹氏)

中国古代医書中の物産誌的考察(米田該典氏)

気功養生学と陰陽学誌(焦国瑞氏、奈良行博氏訳)

踵息考(石田秀実氏)

寒食散と養生(赤堀昭氏)

古代中国に於ける養生術的「匂い」の発端(高橋庸一郎氏)で

ある。なお第二章・古代諸思想と養生説。第三章・道教と養生思想。第四章・仏教と養生思想。第五章・日本・イスラム・インド・ヨーロッパの養生思想とつづく。

いずれも、専門的記述であり、我が国の研究レベルを内・外に示したものと評価できる。この方面の研究や興味をもたれている自然科学者に一読されるようおすすめしたい。

(吉元 昭治)

〔平河出版社、一九八八年、B5判、八二九頁、定価一万五千元〕

野中杏一郎編著『医の歲月 野中眼科二百年史』

本書は、初代李杏が天明五年（一七八五）木曾菅村（現木曾郡木祖村菅）に民蘇堂眼科を開業して以来二百年の歴史を持つ野中眼科六代目の移り変わりの地域医療史大成である。上製箱入りの見事な装丁にふさわしく、内容も実に豊富である。約三十ページのグラビアで木曾から松本への野中医院の移り変わり、歴代医師によって使用された眼科医療器コレクション等私が最も関心を持つ、古医学書の数々がカラー写真をふんだんに取りいれられ紹介されている。

本文では、初代李杏（一七六五—一八二九）が文政六年（一八二二）から文政十二年迄京都で遊学、後帰郷し岐蘇（木曾）の民の為の医院、と言う意味から「民蘇堂 野中医院」と名付け、木

曾の最上流にある人口百五十戸の山村の小さな菅村に門戸を開き、「菅（すげ）の目医者」と言われた事から始まり、二代目杏庵（一八〇五年—一八六八）は、父李杏の勧めによって文化六年（一八二二）京都の高階枳園の門下となり、門人筆頭に推され、紀州徳川家へ往診するまでになっている。杏庵はまた、長崎にも遊学している。

文政十二年（一八二九）帰郷し内科、眼科の手術では評判を高め広範な診療圏を持っていた。

さらに杏庵は天保四年（一八三三）菅村藪原に私塾「民蘇堂塾」を創設し、拾数人の医師を養成している。

三代目杏春（一八四二—一八八一）は安政四年（一八五七）江戸に遊学し今日、野中家に伝わる数百冊の古医書を購入し「藪原の目医者」と称された。

更に四代目隆太郎（一八七五—一九五八）は済生学舎で学び県眼科医会、村議長等を歴任した。

五代目茂乗（一八九八—一九四八）は大正十三年東京帝大を卒業後名古屋大学講師、金沢大学助教授を経て、昭和六年帰郷し野中眼科を継承している。

戦後、松本市に診療所を移転したが、その間郡医師会長、長野県眼科医会会長、日本眼科医会理事を歴任している。

そして今日の六代目、昭和三十年東京医科大学卒業後、独協医科大学助教授を歴任し現地で開業しておられる編集者、杏一郎先生へと、幕末、明治、大正の地方史、世相の資料考証を挿入しながら、小松芳郎氏（松本市史編さん室長）が執筆を加えている。